

時々頂くメールに、『いいなあ、のんびり過ごせて』というのがある。

実に誤解である。

旅行者の仲間によく話題になるのが、『旅人も忙しい』という事。何だかよく分からないが、ほんと忙しいのだ。

やってることは毎度同じ気がするが、新しい街に到着する時にはこんな感じ。

- ・新しい街の情報を入手する(ツーリストインフォメーションに行ったり、ガイドブックを立ち読みしたり買ったり借りてコピーしたり)。
- ・その情報を読んで頭に入れておく。特に為替レートや到着地の地理、習慣など。
- ・到着したら現地のお金を手に入れる。
- ・電車やバスを乗り継いで宿を捜す。
- ・次の国のビザを取得する。
- ・さらにその次はどこへ行こうかを考えて、治安情報などを調べる。
- ・買い物して飯を作って食う。
- ・細々とした買い物をする(水や洗剤やトイレットペーパーなど)。
- ・洗濯する。
- ・日記を付ける。
- ・お小遣い帳を付ける。
- ・写真を整理する。
- ・例えば写真屋さんで、取った写真をCDに焼いてもらって日本に送る(PCが壊れたり盗まれたら怖いので)。
- ・【退職のち放浪】レポートを書く。
- ・インターネット屋を探してメールする。
- ・ビールやワインを買って来て飲む。
- ・飲んで若者と語る。

といった感じである。こう書き出してみると、あれっ何で忙しいんだ？と改めて思うのだが、よく分からないがやっぱり忙しい。そんな合間に、観光したり温泉に入る訳である。だから勢い睡眠時間が短くなったりする。

しかしそうすると体調を崩しやすくなるので、どこかでどっと休みたくなるのだ。

ダハブみたいな場所にいると、もう無茶苦茶のんびりできて、溜まっている日記やレポートを一気に片づけることができる・・・、はずなのだが、こういう場所に来ると不思議と進まない。

ここのネット屋はADSLでとても早くて快適なのに、送る物がなかなか完成しなかったりする。

しかし何でだろう？書き出してみると分かるかもしれない。そこである日のダハブの1日。

- ・朝7時起床(これはグリニッジ標準時間で、エジプトでは10時だったりする)
- ・水を飲む(1.5リットルのペットボトル1本2ポンド(36円))
- ・シャワーを浴びる。
- ・歩いて(といっても5分だけ)海岸のレストランへ行き、みんなと合流。
- ・旅の話でもしながらランチする(食べる物はいろいろ。大体10ポンド(180円))。

- ・腹が満たされたら、ちょっとシュノーケルでもする(1日レンタル10ポンド(180円))。
- ・適度に楽しんだら、海岸に寝転んで本でも読む。
- ・自転車に乗ってビールを買って来て、海を見ながら飲む(ビール1本5ポンド(90円))。
- ・眠くなったら昼寝する。
- ・起きたら一泳ぎする。
- ・疲れたらネット屋にでも行ってニュースやメールをチェックする(1時間4ポンド(72円))。
- ・皆と一緒に夕ご飯を食べる(焼魚定食(超豪華版)は30ポンド(540円))。
- ・やっぱりビールも飲む(ビール2本10ポンド(180円))。
- ・帰りにアイスでも食べる(2ポンド(36円))。
- ・ワインも飲む(フルボトル1本55ポンド(990円) エジプト製)。
- ・眠くなったら寝る(1泊5ポンド(90円))。

といった感じである。

こう書き出してみると、実に多彩でハードな1日であって、日記やレポートを書く暇は一切ないと言える。日記は初日に書くと、後はコピー&ペーストで済むので問題ないが、レポートは一向に進まない。

別の観点からこの1日を眺めてみると、ダハブにおける1日の費用は133ポンド(2,394円)、アルコールエンゲル計数は53%という事が分かった。イスラム教徒が飲まない分を十分カバーし、この国のアルコール産業を育成する積極的な姿勢が伺える。

カイロへ

私がこのダハブでこの様な多忙な日々を送っているにも関わらず、同室のカンボジア系アメリカ人のショーンが早くカイロに行こうと毎日せっつく。

『ここにはやる事が何もない』などと変なことを真顔で言う。

そんな彼が持ってきた本は、ナポレオンヒルの『思考は現実化する』。言ってしまえば如何に金持ちになるかのハウツー本だ。このリゾートには最もふさわしくない本である。

私がいかにその気がないそぶりをした為か、彼は明日のバスチケットを買ってきた。どうやら一人で出発するみたいだ。

私はこのダハブでは一切観光をせず、ビーチで日々過ごしているのだが、人によってはシナイ山に行く。そうモーゼが十戒を授かったというシナイ山だ。このダハブから夜出発するバスがあって、深夜に3,750段の階段を登り、翌朝、日の出を拝んで帰ってくるというツアーである(因みにシナイ山の高さは2285メートル。富士山だったら十五戒ぐらいになっていたかも。よかったよかった)。

ユダヤ教徒でもキリスト教徒でもイスラム教徒でもない私には、全く興味がないのだが、夜になって突然ショーンがシナイ山に行くと言い出した。

今日の昼までは、単に朝日を拝む場所だと思っていたらしい。それが実は、クリスチャンにとって重要な場所だと知って急ぎょ行く事にしたのだ(アメリカで市民権を得た彼はクリスチャンなのである)。

そして買ったバスチケットは私にあげる、是非使ってくれと。因みにバス代は 62 ポンド(1116 円)。ビール 12 本分以上である。安くない。無駄にしないのが友情である。多忙な日々を切り上げて、翌朝、何故か私が急きょカイロに行く事になったのだった。

エジプトの概要

- 1.面積 : 約 100 万 km² (日本の約 2.7 倍)
- 2.人口 : 6,920 万人 (2003 年 1 月)
- 3.首都 : カイロ
- 4.人種 : アラブ人
- 5.言語 : アラビア語
- 6.宗教 : イスラム教、キリスト教 (コプト教)
- 7.略史 : 前 32 世紀頃統一王朝成立。
前 1 世紀よりローマ帝国領。
4 世紀よりジザンツ帝国領。
7 世紀にイスラム化。
19 世紀初頭より近代化に着手
1922 年英国より王政の国として独立。
1952 年クーデターを経て共和制に移行。
1979 年、イスラエルと平和条約を締結。
1990 年、湾岸危機において多国籍軍に参加。



バスは砂漠を突っ走る。行っても行っても砂漠だった。

緯度では沖縄ぐらいだけど、水が降らないと、土地ってのはこんなになってしまうのか、というほど不毛の地が広がっている。

シナイ半島は、本当に何も無いところだ。

海岸沿だけは、ごくたまに街が現れるが、人はまだ住んでいない。たくさんの街を建設している最中らしい。恐らくこういうやり方がいわゆる“入植”なのだろう。

きれいなアスファルトの道路が通った上で、水を通し電気を通せば人は住める。海沿いだし、広い住宅は案外快適かもしれない。

スエズ運河の下を通るトンネルをあっという間にくぐり、カイロに近づいてくると、ようやく住宅地が現れて、人も車も増えてくる。そしていつの間に渋滞が始まった。さすが二千万人都市カイロ。中心部には高いビルもあって、何車線もある車道でも車があふれている。

ダハブからカイロまではバスで 10 時間であった。すっかり暗くなった頃、ようやくカイロのバス停に着いた。

ショックだった。

狭いバスの倉庫に押し込まれたせい、自転車のギアチェンジが破壊され、ギアが変なポジションで止ってしまい、ほとんど漕げなくなってしまっていた。

ハンガリー クロアチア イタリア ギリシャ トルコ シリア レバノン シリア ヨルダン
エジプトと国境を渡って来て、とても愛着がわいていただけに、悲しい。

一応、カイロの宿まで持っていったものの、ダハブで、毎日400メートル離れた酒屋に通ったのが、この自転車の最後の仕事だった。

どうせなら、ダハブで働く日本人ダイビングインストラクターに差し上げてくれればよかったなあ。彼もよく、酒屋さんまで歩いているようだったので。

カイロの飯事情

気を取り直し、まずは飯を食うことに。

コシャリ屋さんに行く。

【コシャリ】とはエジプト特有の料理で、その専門店は、どこの街でも見つけることができるらしい。

不思議な食いもんである。

マカロニ、米、スパゲティ、豆数種類が混ざっていて、そこにトッピングとしてオニオンフライとガーリックフライが乗っている。

ここにエジプト風ミートソースと、さらにお好みでさっぱりとしたソースもしくは、辛いソースを掛けて食べる。これが結構美味しい。

特に穀物のもちっとした食感とオニオンフライとガーリックフライのサクっとした食感が調和して、何とも不思議な食べ物になっている。穀物が柔らかすぎたり、フライが揚げたてでないと、あっという間にまずい食べ物に変身するというものでもある。

このコシャリ、店によって値段が違うが、大体は大きさによって2,3,4,5ポンド(36円から90円)となっている。

頼んでから出てくるまで、日本の牛丼並みに早くて、腹が減ってすぐに何か食べたい時にはとても重宝するのだった。



コシャリの中身。グラタン、米、スパゲッティ、何種類かの豆にソースを掛けて食べる。



町中の至る所にあるコシャリ屋さん。でも味はお店によって違う。特にトッピングの善し悪しが味に大きく影響するみたい。

しかしコシャリ以外に典型的なエジプト飯にはありつけていない。カイロには西洋風のサンドイッチ屋さんもピザ屋さんもケンタもマックもあるのだが、地元民が毎日行くお店を見つけれない(因みにマックのハンバーガーは4ポンド(72円)で味はごく普通)。

そんなある日、宿のスタッフが、どこかの店からランチの出前を頼んでいる。

来たやつを見てみると、実に美味そうだったので私も注文してみることに。

インドのナンを潰したようなパンを、豆で出来たペースト(2種類)に付けて食べる。

トマトのサラダ、カブとキュウリの漬物ともう1品付いて2~3人前が6ポンド(108円)である。



ホテルの従業員がおいしそうに食べるので、注文してみた。配達してもらって、この量(2、3人分)でたったの6ポンド(108円)

エジプトでは、万事こんな調子で、よほどの贅沢をしない限り食事代はすごく安い。

日本の若者の中には、わずか数万円で1年近く

エジプトに滞在する猛者がいるらしい。何だか納得である。真似たくはないけど。

エジプトの郵便事情

皆様に何か送ろう、と調子いい事を言ったものの、アレppoで買ったアレppo石鹼(約3kg)は、ダマスカス(シリア) ベイルート(レバノン) ダマスカス アンマン(ヨルダン) ペトラ(ヨルダン) ダハブ(エジプト) カイロ(エジプト)まで持って来ていた。

シリアやレバノンでは郵便局がよく分からず、ヨルダンとダハブからは航空便しかない事が判明。そんなこんなでカイロまで持って来てしまったのだった。石鹼だけじゃなんだから、ついでに死海の塩も送ろうと3kgばかり買ってしまっ、自転車の後輪はかなり厳しかった(後輪が壊れたなら納得だったのに)。

自転車なき後、もう待った無し。カイロの中央郵便局へ行く。

人に贈り物をしておいて、こんなに苦労しました、という当てつけみたいになってしまうが、そんな積もりは毛頭なくて、これは純粋なとほほ話である。

1. まず外国へ送る郵便窓口がどこか分からなくてタライ回しにあう。
2. 海外向け小包の窓口(1階)を発見し、小包を出すと、まずカスタム(3階)に行けと言われる。
3. カスタムに行くと、まずエレベーターホールで、中身を開けると言われる(せっかくテープを張ったのに...)。中を見せると、小部屋に案内される。
4. 小部屋で、出された小さなフォームに、名前等を書き込む。
5. それを持って、別の部屋に行き、通関手数料か輸出税か知らないが、とにかく金



小包のカスタムを牛耳る郵便局のオバチャン。たくさんの書類が彼女のところに集中する。仕事はのろい。

を払う(中身はエジプト製じゃないんだけどなあ)。

6. また同時にアプリケーションフォームと呼ばれる書類を買う。
7. 小部屋に戻り、アプリケーションフォームを埋める(書いてある事はぜんぜん分からない。一度に説明されてもチンプンカンプンだよ)。
8. 日本のみならず台湾への荷物があったので5-7を繰り返す(先に言ってくれよな!)
9. エレベーターホールに戻り、10個の荷物1つ1つに紐を十字に掛ける。
10. 紐を掛けたら、10個の荷物1つ1つに、結んだ紐の端から鉛の重りを通し、封印してもらう。
11. 1階に戻り、10個の荷物のリストを作る。
12. 荷物それぞれを計ってもらう(全部同じだって言ってるのに全部計るエジプト人)。
13. 荷物に、差出人住所が書いてないと駄目と言われ、10個の荷物全部にエジプトのホテルと住所を書く(空しいぜ)。
14. お金を払い領収書もらう。
15. 3階のカスタムに戻り、領収書を見せて、別のフォームもらう。
16. このフォームを1階の窓口に出す。



エジプトの中央郵便局から出した10個の小包。これを出すまでに3時間も掛かってしまった。

でようやく終わり。時間にして3時間。

1つ1つの書類がよく分からない上に面倒で、おまけに10個もあったから時間が掛かるのは仕方ないが、エジプト人“横入り”が得意なのである。そしてそれを平然と受け入れてしまう郵便局員。

そりゃー、たくさんの荷物を持った外国人が現れると躊躇するのはわかるが、いずれ処理しなきゃいけないんだからちゃんとやってくれよな。

小部屋のオバチャンはアラビア語しかできないし、窓口の兄ちゃんは実に態度がでかい(エジプト人って、世界で一番態度がでかいと思う。古代エジプトだったら分かるけど、現代ではただの偉そうな貧乏人で、逆に惨めに見えるぜ、あんた達)。

おまけに、ビニールテープとマジックペンを持っていたせいか、とても人気者になってしまって大活躍する割に、何故かどんどんと抜かれていく私。

もう二度とエジプトからは荷物を送らない事を誓うのであった。

1つ学んだのは、横入りの仕方。

前の方で並んでいる人に何気に近づき、親し気に肩に手を乗せて世間話する。

そのまま、何気なく並んでいる列に自分の肩を入れる。

列が進むと同時に体も入れる。

後ろはけして振りかえらない。
ポイントは、 の“肩”である。もう負けない。

ツタンカーメンとミイラ

エジプト考古学博物館の入場料は、20 ポンド(360 円)と、大物がある割には良心的な価格なのだが、残念な事にカメラ持ち込みは厳禁なのだった(密かに持ち込もうとしたら、X線に見つかってしまった)。

黄金のツタンカーメンは、東洋人の様な西洋人の様な、ちょっとよく分からないがとても優しくな顔をしていた(だいぶ陳腐なコメントですが)。

博物館の中には、もう1つゲートがある。ミイラの展示室だ。ここで、さらに40 ポンド(720 円)払ってミイラを見る(こちらはちょっと高い)。

ミイラの顔は、しわくちゃなオジイ・オバアと骸骨を足して2で割ったようなもので、ちょっと怖い。よく骸骨から生前の顔をコンピューターで計算するってやつがあるけど、このミイラも同じように出来ないものかなあ。気味悪がられるだけでちょっと可哀想だ。

この博物館の展示物、日本だったら重要文化財級の古いものが多いのだが、さすがエジプト、たくさんありすぎて、もはや物置のようになっている。

棺桶の模様なんかもよく見れば細かい描写で素晴らしいのだが、ずらーっと並んでいてササッと通り過ぎてしまったりする。エジプトの高校生が模写している画用紙を見てハッとしたりするのだった。

しかし、それにしても写真が取りたかったよ、スフィンクス(ミイラはいらないな)。

ピラミッド

ガイドブックには、『ピラミッドを見るなら暑さを避けて早朝がベター』と書いてあるが、エジプトのピラミッドでは、【音と光のショー】というやつをやるらしい。

じゃあ、むしろ夕方に行こうと思い、4 時頃にピラミッドへ到着。

入場料は20 ポンド(360 円)のはずだが、何故か60 ポンド English と書いてある。

60 ポンド? English??

どうもピラミッドの見学は4 時で終了していて、入場者が完全に出払ってから音と光のショーをやる、という事に気がついた。

1 日に3 回ショーをやる。この日は英語、スペイン語、イタリア語。木曜日には日本語も1 回あるらしい。

せっかくピラミッドに来たからには、せめて【音と光のショー】をしっかりと見ようかと思ったが、60 ポンドはなかなか高い。

ふと見ると、スフィンクスの目線上に、ケンタッキーとピザハットが入ったビルがある。その距離500 メートル。

ピザハットは2階と3階。室内が結構明るいのでどうかと思ったが、何気に階段がさらに上へ伸びている。

店員は案内したがらないが、行ってみると屋上席があるのだった。

『ここは団体が予約済みなので駄目だ』というので、

『ビッグチップが君を待っている』と答えると即座にOKになった。

『先にくれ』というので、

『先払いならスモール。後払いならベリーベリービッグ。ノープロブレム。OKさ!』と自問自答しながら店員を追っ払った。

【音と光のショー】は、何だかとても引かれる響きがあるのだが、エジプトの歴史を淡々とアナウンスし、時々遺跡の壁をスクリーンにした映像が流れ、ピラミッドが何色かに照らされる、という様なもので、全然大したショーではないはっきり言って60ポンド(1080円)では割に合わない(日本語バージョンはもっと高いのかも)。



ピザハットの屋上から見た光と音のショー。スフィンクスに光が当たってきれい。

対するピザは30ポンド(540円)である(ジュース代と2ポンドのチップ込み)。

おなか一杯になったし、高い位置から写真も取れたし、実にリーズナブルなショーであった(店員がリーズナブルであったかどうかは知らない)。

後日、今度は早朝にピラミッドに行く。カイロの中心部から、タクシーで40分という距離にあるのでとても便利である。タクシーの料金はわずかに15ポンド(270円)。

近くに行ってみると、やはりでかい。

縦1.3メートル、横2メートルほどの石が整然と、しかも無数に積み上がっている。

やっぱりこれを運んだというのはすごいことだ。

工期は20年ぐらいだったらしい。

いつかプロジェクトXで、是非放映して欲しいものだ(ってそれは無理か)。

現代ならこうやってああやって、期間と金額はこれぐらい、という計算はあるらしいのだが、どうせなら、【音と光のショー】なんかより、実際にピラミッド建設プロジェクトでもして欲しいなあなど思うのであった。



朝一番のピラミッドの様子。内部へ行くまでの数メートルの高さまで登ることが出来るようだ。

つづく